様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　２１日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３３０１１８
研究課題名（和文）　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究

研究課題名（英文）　Sociological Study of Alternative Social Movements Against Food Globalization

研究代表者
つる　理恵子（TSURU RIEKO）
吉備国際大学・社会学部・准教授
研究者番号：２０２２７４７４

研究成果の概要：食のグローバル化に伴い発生する諸問題に対するオールタナティブな動きの現状と課題、今後の展望などについて、農村・環境・労働・理論社会学・社会運動論等の立場から実証的かつ理論的研究を行った。農村女性起業とエンパワーメント、地域再生の取り組み、コミュニティ・ビジネスの観点からのミクロ分析においては、食と農を媒介に多様な主体が結びつく中で地域社会・地域農業・個人の生活が創造・再編・維持されている現状を捉えることができた。また、スローフード協会の組織および会員対象の調査からは、支部毎の相違、イタリアとの差異などを捉えることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２００７年度	2,900,000	870,000	3,770,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	7,700,000	2,310,000	10,010,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：スローフード、有機農業、地産地消、オールタナティブ運動、コミュニティ・ビジネス、グリーンツーリズム、ロハス、資源動員論

１．研究開始当初の背景

グローバル化の進行の中、オールタナティブな運動としてスローフード、地産地消、有機農業、NPO、コミュニティ・ビジネスが、なぜ台頭してきたのか。それらの取り組みはどのようなものか。

本研究では、グローバル化を極端な経済合理性にもとづく社会関係の商品化、単純化が国境を越えて浸透している過程ととらえ、これに対する対抗文化として地域アイデンティティを求める「新しい社会運動」が台頭していると理解する。そして、こうしたオールタナティブな運動が問い直そうとしているのは、生産－流通－消費という一連のプロセスが単純化、規格化、大規模化する（すなわち、マクドナルド化、グローバル化が進行する）中で、プロセスのどこかに関わる人たち同士の関係はほとんど断絶したものとなってしまっている点であることに着目し、研究を進めた。

２．研究の目的

本研究の目的は、このようにして進行する現代社会の諸側面を、「食」とそれにかかわる「労働」という観点から問い直すことである。

それは、近代化が進展させたものは何か、損なったものは何か、というすぐれた理論的な考察にもとづき、身体、生命に関わる実践的な政策課題を探求することとなりうる。その探求の根底には、産業化、合理化、効率化という近代社会を形成してきた原理とは異なる、ボランタリーセクターや社会的経済という点に着目した、新たな社会形成の構成原理を捉えることがある。

３．研究の方法

本研究では、ここにあげたオールタナティブな運動に関わる社会集団・組織、ネットワーク、個人などへのインタビュー・参与観察などのフィールドワーク、質問紙調査による統計的調査を通して、それぞれの運動や実践の現状と課題を明らかにする。

そのことにより、ボランタリーセクターや社会的経済についての考察を深め、地域社会論、社会運動論、農村社会学、環境社会学などの社会学的研究に寄与する研究成果をあげることができよう。

４．研究成果

主な成果

食のグローバル化へのオールタナティブ運動として捉えうる諸現象の大枠をつかむと共に、相互の関係性やそれぞれの概要・構成要素、担い手や推進主体・社会関係の特性、運動の成果や課題と展望などについて、捉えることができた。

農村女性起業とエンパワーメント、地域再生の取り組み、エコシティという観点から見た自治体運営、地域社会再構築のありよう、有機農業推進法成立・施行が日本の有機農業運動に与える多大な影響が明らかになった。

また、スローフード協会の組織および会員対象の質問紙調査からは、日本におけるスローフード運動の概要とイタリアとの相違点と共通点、運動参加の規定要因として資金・設備、人間関係、ローカルレベルにおける運動への理解や共感などがあることが分かった。

さらに、農産物の生産―流通―消費までの一連の過程が見えなくなっていることにより生じる諸問題に対し、コミュニティ・ビジネスや六次産業化などの多様な取り組みが広がっている実態を捉えることができた。

韓国とイタリアにおける合鴨農法や親環境農業、有機農業運動とむらづくり、生活協同組合運動との接点などの調査からは、意外なほどに日本との共通点が多いことも明らかとなった。食のグローバル化へのオールタナティブ運動が持つ普遍性と言えるだろう。1970 年代以降、近代化の進展した諸地域（国）において、同時代的に農村文化の見直しや伝統的農業の再評価がなされるようになり、それらが現在、グローバル化の対抗拠点として有機農業やグリーンツーリズム等につながっていることが把握できた。

近代化へのオールタナティブから出発したそれらの運動が、近年きわめて自覚的にグローバル化への対抗戦略として意識されるようになり、地域・生活・労働などを根底から問い直す動きへとその射程は広がっている。

人々がローカルであることの持つ根源性に価値を見出し、食と農を媒介に多様な主体が結びつく中で、地域社会・地域農業・個々人の生活が創造・再編・維持されている様子を動態的につかむことができた。

国内外における位置づけとインパクト

以上のように、本研究は食と農、地域社会、グローバル化への対抗戦略とその実際、労働の意味などが交差する人々の日常生活に深く分け入るミクロ分析の視点とグローバル化の諸影響やさまざまな社会運動および実践相互の関連性を捉えるマクロ分析の視点の両方を持ち続けた。そして、地域社会論、社会運動論、農村社会学、環境社会学などの先行研究をふまえつつ、これまで取り上げられてこなかった食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する理論的かつ実証的研究として先駆的なものとなった。

今後の展望に関して、以下のような問題関心を挙げておこう。現在、大きな転換期を迎えている日本の有機農業運動が国民的運動となりうるのか、日本にもたらされたスローフード運動の今後の展開、半農半Ｘの思想の広がりが意味するもの、農的暮らしに惹きつけられる多くの都市住民たちの創り出す動き、コミュニティ・ビジネスや社会的企業の広がりと地域社会の再構築、住民自治・協働・内発的発展の視点に立脚する自治体運営、などがある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１８件）

①Rieko Tsuru, ”Background and the factors promoting Women’s Empowerment in Japanese Rural Society” Eun-Mi Kim and et.al ed *”2008 Korea-Japan Seminar An Evaluation of the Roles of Women Farmers in East Asia”*2008, p215-231,査読無。

②つる理恵子、報告２　農家女性の視点か

ら「地域の力」を発揮する方法を考える、懐かしい未来ネットワーク編『農村文化運動』192号、2009、農山漁村文化協会、p61-67、査読無。
③つる理恵子、物語りに出会うまちづくり－岡山県高梁市の事例から－『農業と経済特集　農村定住をささえるスモールビジネス』2008年11月号、2008、昭和堂、p51-55、査読無。
④つる理恵子、第４章　有機農業運動からみたオールタナティブ運動の現状とその可能性、『科研報告書　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究』2009、p53-76、査読無。
⑤つる理恵子、第８章　ローカルであることの根源性、『科研報告書　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究』2009、p113-117、査読無。
⑥家中茂、地方活性化：まちの誇りと活力を持続させる、取り戻す　－いんしゅう鹿野のまちづくり、日本都市計画学会『都市計画』277号、2009、p51－54、査読有。
⑦奥村義雄、第２章　グローバル化・ＷＴＯ体制下の農政の展開―「地産地消」運動の背景・要因 ―『科研報告書　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究』2009、P36-42、査読無。
⑧奥村義雄、第３章　世羅高原における「地産地消」運動、『科研報告書　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究』2009、P43-52、査読無。
⑨碓井たかし、日本のエコシティ－兵庫県豊岡市と愛媛県今治市の比較研究－、『吉備国際大学社会学研究科論叢』10 、P123-150、査読無。
⑩碓井たかし・星敦士、日本のスローフード運動、『科研報告書（分冊）　スローフード運動に関するアンケート調査報告書』2009、P1-29、査読無。
⑪碓井たかし、序説　農食問題と農食運動、『科研報告書　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究』2009、P1-15、査読無。
⑫碓井たかし、第１章　食安全プログラムを埋め込んだエコシティ－兵庫県豊岡市と愛媛県今治市の事例―、『科研報告書　食のグローバル化へのオールタナティブ運動に関する社会学的研究』2009、P16-35、査読無。
⑬碓井たかし、佐藤匡、有機農業の生産－消費のネットワーク　－岡山・宮崎の比較研究、『吉備国際大学社会学部研究紀要』第18号、2008、p23-45、査読無。
⑭星敦士・本郷正武、スローフード運動における良心的支持者、甲南大学文学部『社会科学特集』151、2008、p1-21、査読無。
⑮家中茂、地域コミュニティの現在－沖縄における研究動向と竹富島の事例から、日本地方自治学会編『地方自治叢書20　合意形成と地方自治』2008、p105-133、査読無（依頼原稿）
⑯碓井たかし、農食運動の情報論的分析－「スローフード」運動の言語戦略を中心として、『吉備国際大学大学院社会学研究科論叢』2007、p139-149、査読無
⑰Takashi USUI, Regulations in Organic Agriculture: Two Case Studies from Southwestern Japan, Journal of KIBI International University Graduate School of Sociology,No.8,2007,p103-117　査読無。
⑱Takashi USUI, Fast Food and Slow Food: A Theoretical Introduction to Contemporary Agrifood Problems, Journal of KIBI International University Department of Sociology, Vol.17,2007,p15-22 査読無。

〔学会発表〕（計　５　件）
①Rieko TSURU, Background and the factors promoting Women's Empowerment in Japanese Rural Society, IRSA (2008) ,2008,7,11, Korea
②つる理恵子、農村ビジネスは集落を再生できるか－岡山・高梁市の事例から－、日本村落研究学会2008年度大会、2008年11月2日、新潟県佐渡市
③つる理恵子、食の変遷から見えるもの－農村・農業の近代化と現在－、岡山民俗学会2008年度研究発表大会2008年4月27日、岡山県岡山市
④碓井たかし（代表）・星敦士、農食運動の情報論的分析－「スローフード」を中心に、第81回日本社会学会大会2008年11月24日、東北大学
⑤碓井たかし・奥村義雄・星敦士、農食をめぐるオールタナティブ運動の運動特性－地産地消・有機農業・スローフードの場合、関西社会学会、2007年5月27日、同志社大学

〔図書〕（計　７　件）
①鳥越皓之・帯谷博明編著『よくわかる環境社会学』（つる理恵子：農村女性起業とエンパワーメント）ミネルヴァ書房、2009、P80-82
②藤井正・光多長温・小野達也・家中茂、『地域政策入門』ミネルヴァ書房、2009、331頁
③鳥越皓之・家中茂・藤村美穂、『景観形成と地域コミュニティ－地域資本を

増やす景観政策』2009、農山漁村文化協会、308頁
④山尾政博・島秀典編著（共著者　家中茂）、『日本の漁村・水産業の多面的機能』2009、北斗書房、250頁。
⑤碓井たかし、桃とピオーネ―「果樹王国」備中の先進性、（吉備国際大学「備中高梁学」研究会編『「備中高梁」に学ぶ』）吉備人出版、2008、117頁（p61 -70）
⑥つる理恵子、『農家女性の社会学―農の元気は女から』コモンズ、2007、251頁。
⑦家中茂、社会関係のなかの資源―慶良間海域サンゴ礁をめぐって、（松井健編『資源人類学０６　自然の資源化』）弘文堂、2007、350頁（p83 -119）

６．研究組織
(1)研究代表者
2006 年度～2007 年度
碓井たかし（USUI TAKASHI）
吉備国際大学社会学部・教授
研究者番号：４００７９４４７
2008 年度
つる　理恵子（TSURU RIEKO）
吉備国際大学・社会学部・准教授
研究者番号：２０２２７４７４
（2006 年度～2007 年度は研究分担者）

(2)研究分担者
星　敦士（HOSHI ATUSHI）
甲南大学・文学部・准教授
研究者番号：９０４１１８３４
家中　茂(YANAKA SHIGERU)
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号：５０３４１６７３

奥村義雄（OKUMURA YOSHIO）
吉備国際大学・社会学部・教授
研究者番号：１０１０９１００
（2006 年度～2007 年度研究分担者）

(3)連携研究者
本郷正武（HONGOU MASATAKE）
東北大学・文学部・助教
研究者番号：４０４５１４９７